



第47回

The 47th annual meeting of Japanese Society for Vascular Surgery

日本血管外科学会 学術総会

血管外科フロンティア

～世界への発信～



2019年5月22日(水)～24日(金)



会場

ホテルナゴヤキャッスル

名古屋市西区樋の口町3番19号

会長

古森 公浩

名古屋大学大学院医学系研究科 血管外科学分野 教授

事務局

名古屋大学大学院医学系研究科血管外科学分野
〒466-8550 愛知県名古屋市昭和区鶴舞町65
TEL:052-744-2224 FAX:052-744-2226
E-mail:jsvs47@med.nagoya-u.ac.jp

運営事務局

株式会社コングレ 中部支社内
〒460-0004 愛知県名古屋市中区新栄町2-13 栄第一生命ビルディング
TEL:052-950-3369 FAX:052-950-3370
E-mail:jsvs47@congre.co.jp

<http://www.congre.co.jp/jsvs47/>

同時開催

第11回 日韓血管外科学会

シンポジウム 11 静脈瘤に対する血管内治療の中長期成績

「再発症例に共通する因子と再発様式に関する検討」

西の京病院血管外科 今井崇裕

【はじめに】 国内で 2011 年から血管内焼灼術が保険適応となり、下肢静脈瘤の標準治療となった。レーザーやラジオ波など使用機器の選択肢は増えたが、依然として遠隔期の再発には課題を残している。

【目的】 今回、血管内焼灼術後に再発が懸念される症例を抽出して、それらに共通する因子を見つけることで、治療に反映させることができないか検討した。

【対象】 2016 年 10 月-2018 年 5 月。血管内焼灼術を施行した 1,383 例(M:484/F:899, 63.2±12.3 歳, C1:10/ C2:1,030/ C3:13/ C4a:269/ C4b:32/ C5:16/ C6:13). GSV:1,081/ SSV:302 例。使用機器 Laser1470:746/ Closure FAST:637 例。

【方法】 再発が懸念される定義は、早期の不十分な焼灼、中期から閉塞断端が 50mm を超過、消退率上昇, SFJ 周囲分枝の血流再開とした。消退率は[術後径/術前径 x100](%)で算出した。観察期間は 6-12 ヶ月として、術前後の超音波および術前の MRvenography 検査で評価した。項目は SFJ/ SPJ から閉塞断端(mm), 焼灼血管消退率, SFJ の血流のある分枝数(本)とした。当院の標準術式は GSV/ SSV とも合流部 10mm 末梢, SSV 高位分岐は膝裏皺 20mm 中枢から焼灼を行った。対象症例において、各検討項目が観察期間でどのように変化したかビジュアル化した。

【結果】 再発が懸念される対象症例 21 例(M:5/F:16, 65.8±10.1 歳). GSV:14/ SSV:7 例, Laser1470:8/ Closure FAST:13 例。早期の開存 1 例/ 50mm 以上で閉塞 6 例。中期に 50mm 以上で閉塞 7 例。閉塞断端の新生血管で静脈瘤形成 1 例。血管消退率は早期 33.4/ 中期 41.6%。平均分枝数は早期 0.42/ 中期 1.14 本。SSV は GSV の症例に比べ割合が高かった。

【考察】 再発した SSV 症例の術前平均血管径は 5.7mm で、これらの症例は術早期には問題なく経過し、平均 91.5 日で再発している。SSV の症例では、術後の慢性的な膝関節の屈伸や腓腹部の筋ポンプ作用などが血流再開に影響していると思われた。

【結語】 再発が懸念される症例では、術早期には問題なく経過し、3 ヶ月以上経って末梢側へ閉塞断端が移動する。術後はそれ以上の期間のフォローアップが必要である。